

湖柳生(野口英世)と歯科レントゲン

谷津 三雄、渋谷 敏

奥村鶴吉著『野口英世』(昭和八年十一月刊)の年表によると、「一八七六年(明治九年)十一月九日福島県耶麻郡翁島村に生まる。幼名を清作と呼ぶ。一八九六年(明治二十九年)二十一歳、九月上京。十月医術開業前期試験合格。十一月血脇守之助氏の好意にて高山歯科医学院の学格となる。一八九七年(明治三十年)二十二歳。五月済生学舎入学、十月後期試験に合格する。同月高山歯科医学院講師となる。十一月順天堂病院助手となる。一八九八年(明治三十一年)二十三歳。四月伝染病研究所助手を命ぜらる。八月帰省中英世と改名す」とあり、「順天堂病院医員には、刀圭界のそうそうたる大家が幾人も鼻を並べていて、その下にも相当経験のある医師が揃っていたので、今日かけ出しの野口清作が、医師としての腕を振るう余地が無かった。彼は主として同院発行の『順天堂医事研究会雜

誌』の編輯部員にあてられて、編輯主任の菅野徹三氏の下に働く事になり、賄付で報酬月二円というのであった。それはあまりに貧弱なものであった。編輯とか著作とか文筆を勞することも彼の好む所であったので、多少の興味を持って之れに従った。主任菅野氏から、彼に命ぜられた事は、絶えず病室の方に注意して、面白い患者があった時は、報告を書き、また医学上不明な点があったら、図書室にはかなり新刊の参考書を用意してあるから、それを読んで、新しい説を発見したら、その報告もせよと云うのであった。こんな囑託をうけた彼は各病室を巡回する時、或は傍觀の時に血眼となつて、病状病因を究めることに腐心した。僅かの閑があつても直ぐ病室と図書室で、注意深く研究して原稿を作った」と順天堂時代のことが記されている。

また、橘輝政著『野口英世博士伝』(昭和二十一年九月重版)の順天堂医院時代の項に「変つた患者に出会つた場合とか外国の雑誌に出ている面白い医法など次から次へ雑誌に載せた。内容は忽ち清新化され、読者や一般医界から注目されるようになった」とある。

一方『順天堂史、上巻』（昭和五十五年五月刊）の野口英世の項に「明治九年（一八七六）一月九日福島県耶麻郡翁島に生まれた。明治三〇年（一八九七）五月済生学会へ入学。一〇月医術開業試験に合格。同年十一月順天堂医事研究会に入会した。それ以後三一年八月まで野口清作、野口湖柳、湖柳生、SN生などの名で順天堂医事研究会雑誌に原著、抄録、翻訳等を多数投稿している。：清作を英世と改名したのは順天堂時代の終りごろと思われる」とある。

『順天堂医事研究会雑誌』第二七一号（明治三十一年四月十五日発行）の実験録に「両唇缺損ニ頰部ヨリ辨ヲ採取シタル造唇術」順天堂、湖柳生と題し一七～二二頁に、『順天堂医事研究会雑誌』第二七六号（明治三十一年六月三十日発行）の臨床瑣談に「頰粘膜及齒齦肉腫（妊娠七ヶ月）」の口腔外科に関する症例が報告されている。

なお『順天堂医事研究会雑誌』第二七九号（明治三十一年八月十六日発行）四二頁に「野口清作君、湖柳生の名を以て豫て本会紙上に於て斯道の為めに盡力せられたる同氏は勉学の為め今度本会を辞されたり。一事漸く成りて得々

たる青年多き世の中に氏の如きは蓋し有数の士と謂うべし。吾人は大に其精神を賛せずんばあらざるなり」と記されている。

この湖柳生について、鈴木勝が「日本における歯科レントゲン学のあゆみ」のなかで「明治三十年三月発行の『歯科医学叢談』高山歯科医学院院友会の雑誌で現東京歯科大学の機関誌『歯科学報』の前身）第七号、三七～三九頁に Dental Review Vol. XI, No. 1, Jan., 1897 より抄録して『るよんとげん X 光線ヲ応用シテ欠生齒ヲ発見セシ一例、湖柳生記の紹介がわが国の歯科レントゲンに関する記載の最初のものである』と述べ、また、同誌の六八～六九頁に『X 光線応用』と題し、恐らくわが国におけるレントゲン線透視法の最初の記載と考えられる一文を掲載しておるが、この記事には訳者の名が記載されていない。恐らく湖柳生の訳と考えられる。これは内容が歯科に関するものでなかったためと考証されよう。また、同誌第八号（明治三十年六月発行）の五六～五九頁にかけて湖柳生によって『真空管内の光線』と題してあるが、これには米国のマクファーンムア氏の開発したレントゲン線に関する理論を報じてい

る。そしてここに注目すべきは一八九七年(明治三十年)にレントゲンのことを齒科界に紹介したこの湖柳生というペンネームかまたは本名か不明であるが、この湖柳生とは一体いかなる経歴の人であろうか」と結んでいる。

このように野口英世(湖柳生)がわが国において最初に齒科におけるレントゲンを紹介したことはあまり知られていない。

(日本大学松戸歯学部)

野口英世箕面銅像搬入経路と除幕者

石 原 理 年

昭和三十年十一月二十七日、大阪府箕面公園に野口英世銅像が建立されたが、本像の国鉄福知山線川西池田駅より、建立地までの搬送路と方法、除幕者については明らかでない。

今般、搬入者である、箕面市桜五ノ一一(当時箕面町議)阪本利一氏より搬送について、また、除幕式に小学生代表を引率して出席した当時の小学校教諭より除幕者についての口述を得たので報告する。

阪本氏は「昭和三十年十一月初め、当時の上田藤太郎町会議長より、野口銅像を箕面公園に建立するについて、川西池田駅より建立地までの搬送を依頼された。野口博士の人となり、本像建立に至る多くの方々の労苦に感激し、一町民としてこれを受諾した。銅像建設会よりの条件は、十一月二十二日 正午厳守で、阪急箕面駅前に到着すること